

「恋に住み着く一輪の花のようだった」
(お試し版)

「貴女も人探しをしているの？」

私の目の前に現われた少年は、唐突に言った。私の目を覗き込み、まるでその奥にある脳髓まで舐め回されているかのようだ。不思議な感覚である。

「ええ、そうよ。よくわかったわね」

私は特に不快感を表に出さずにそう答えた。知らない人間に声をかけられることは慣れていゝるし、別段、それを迷惑だと感じることもない。ただ、この少年は、これまで私に声をかけたきた人間とは違っているように思えた。

「貴女から不幸が出ていたからね」

「不幸？」

「そう。僕も色々なタイプの不幸を見てきたけど、貴女のそれは、会いたい人に会えないものだ。たとえばかりで好きだった人、とかね」

「へえ。お兄ちゃん、すごいんだね」

「まあね」

少年は得意げな顔をして言った。心を読まれているかは知らないが、こちらの状況を当ててしまったことには素直に驚いた。もしかしたら私の知らない世界がまだまだ存在するのかもしれない。

「ついてくるかい？」

「え？」

「僕が貴女の探し人の所まで案内してあげるよ」

「でもそんな……」

「かまわないさ。だって僕は、【探し人】だからね」

「探し人？」

「そうさ。必殺仕事人みたいでカッコイイだろ？」

少年はそう呟くと、よほど自分の言ったことが面白かったのか、ひとりでゲラゲラと笑い出した。笑うと目が糸のように細くなり、その姿は年相応であるかのようで、少しだけ私を安心させた。

「ふふ。面白いわね」

「でしょ？」

「わかったわ。お兄ちゃんについて行くことにする」

こうして私は、少年の手引きを受けることとなった。

家出をした。こんなことは人生で初めてのことである。これまで、至極真つ当にまさに真面目という漢字が擬人化したかのような生活を送ってきた私からすれば、まさにこれは天変地異でも起こったかのような事態だった。厳密に言えば、天変地異が起こったかのように感じたのは私の家族親戚友人知人であつて、彼らからすれば、私とその天変地異の震源地であるということなのだけでも。しかしながら、現在の私の心境は意外と落ち着いていて、天変地異といつても、中心は静かであるという意味でこれは台風なのだな、と思つてしまうほどだ。いや、こんなことを思っているのは私だけか。まあとにかく、この家出は私からしてみれば人生の一大決心。一念発起。一発逆転。な機会のわけだけでも、今現在私がどこにいるのかがまったくわからない。どうしよう。

佐渡を出て新潟までフェリーで来たことは間違いなかった。新潟特有の低い山々が空と同じ藍色をした水平線の向こうに見えたり、カモメだつて雰囲気を作つて場を盛り上げようと必死に飛んでいたように記憶している。カップルや家族連れを尻目に、私はトラックの運ちゃんたちと食堂で飲み物を飲んでいたので。そうここまでは合つていたはずだ。最初の予定通り計画通り至極同然大正解ということか。フェリーを降りてから新幹線に乗つたことも、私の選んだ交通手段としては正しい選択であつたはずである。初めて乗る新幹線は私が思つていた以上に静かで、窓から流れる景色はまるでビデオゲームのようであつたと記憶している。なんだか体

がフワフワしてしまつて、体だけが心を置いてきぼりにして進んでいるような、そんな感覚がした。——そうだ、思い出した！ 私は自分の意志で新幹線を下車したのだ。なにぶん田舎者なもので、沢山の人が降りる場所こそが上野であると勘違いをしまつていたらしい。いやはや、恥ずかしい限りである。

ふと上を見上げれば看板がある。

——ここは熊谷だった。

ホームページ [「http://ashikure.3rn.net」](http://ashikure.3rn.net)

ブログ [「http://ameblo.jp/ashikure-no-tsukaima/」](http://ameblo.jp/ashikure-no-tsukaima/)

Twitter [「http://twitter.com/ashikure_U1」](http://twitter.com/ashikure_U1)

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。